
妖精の尻尾 始めの一步 短編

たぬく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖精の尻尾 始めの一步 短編

【Nコード】

N7888S

【作者名】

たぬく

【あらすじ】

どうしてもフェアリーテイルの小説が書きたくて短編を投稿しました。

至らない点がありましたらぜひ感想にてお申しつけ下さい!!

(前書き)

初めまして、たぬくと言います。

初心者ですので、至らない点が沢山ありますが、どうかよろしくお
願いいたします。

では、どうぞ(^o^)ノ

初めまして。カイト・アルタイルです。

実は今、このマグドリアの町じゃ名高いフェアリーテイルというギルドの前に来ています。

なんでも俺と同じ滅龍魔導士が居るらしいんです。
なんと二人も！

いや、何て言うか今まで会った事無かったので感無量ですよ。はい！

「どうしたの君？私達のギルドに何か？依頼かな？」

「え？」

声の聞こえた背後を振り返ると金髪の女性ルーシイですが立っていた

「このギルドに入りたいんですけどマスターに会わせてくれませんか？」

「え？その歳で？止めといた方が良くないかな？楽しいけど危険なんだよ？」

相手は善意から言っているのだろうが、こちらとしては迷惑極まりない

「じゃああなたに勝てば良いんですか？」

「うつ!?・・・」

と、とりあえず立ち話も難だから入ろうか」

「?」

今の女性の反応に違和感を覚えるが、とりあえず進められるままギルドに入った

「へえ〜・・・ここが」

「うん。私達のギルド、フェアリーテイルよ!」

「どうしたんだよルーシィ?ん?誰だそいつ」

「あ、ナツ!実はこの子・・・」

ゴニョゴニョと俺には聞こえない声でやり取りをする二人。

「ナツ・・・?もしかして滅龍魔導士の!?!」

「え?ああそうだぞ?」

「教えて!父さんはどこ!?!マギアレシルはいつたいてどこにいるの!?!」

俺はナツの肩を掴み一気に質問を続けた。

何年も前になる・・・

突然、両親の代わりに俺に色々な事を教えてくれた龍『闇龍マギアレシル』が俺の前から忽然と姿を消した

両親の顔も分からない、いや覚えていないが正しいか、俺はその間龍を追い世界を転々としてきた。

だから自分と同じ滅龍魔導士がこのフェアリーテイルにいると聞いた時は飛んで喜んだ。

今まで手に入れる事が出来なかった唯一の手がかり

そんな思いに身を任せ、三日三晩寝ずにこのマグドリアまで歩いてきたのだ。

が、そんな思いは同じ滅龍魔導士の言葉によってそこはかたなく散っていった

「悪いけど知らねえよ」

ガクツとナツの肩を掴んでいた手の力が抜ける。

ついでに眠気まで襲ってきた。

「あ、おい！」

「ちょっとどうしたの!？」

膝が床について、失望感と共に込み上げてくる眠気に身を任せ俺は意識を闇に落とした。

「知らない天じよ」「あら、起きた?」・・・」

セリフが言えず仕舞いで不機嫌そうに声の方を向く

「えっと、私何かしたかな?」

「いえ、大丈夫です。あなたは?」

声の主はドアから入ってきて俺の隣で座った。

白い銀髪と愛想の良さそうな笑顔が特徴の女性（カイト主観）だ。

「私はミラジエーン。フェアリーテイルで受付嬢をしてるの。よろしくね」

「フェアリーテイル?じゃあここは・・・」

俺の考えに予想がついたのかミラジエーンさんは首を縦に振った。

「だけど良いんですか?」

身元も分からない俺なんかを介抱して・・・」

「あら?ルーシィがあなたがここに入りたらしいって言ってたわよ?

それにこのギルドの皆はそんなこと気にしないわよ」

「・・・そうですか」

当然の事のように笑うミラジェーンさんだけど、それが当然じゃないから聞いたんだよね。

「・・・ナツ達から聞いたんだけどあなたは・・・」

「はい。闇の滅龍魔導士です」

「」「」「滅龍魔導士!?!」「」「」

ドタバタと一気に何人もの人達が部屋になだれ込む

「?」

「あらあら」

「ナツとガジル合わせて三人目だぞ!」

「あいつ何を喰うんだ!?!」

「あの子可愛いっ!」

さ、騒がしい・・・

ミラジェーンさんに視線を向けても、いつもの事のように笑いながら見ていた

これが普通?いいのか、これで・・・?

「静かにせんかっ!」

ガヤガヤとしていた室内がシュンと静まりかえる。

サツと部屋の入口を塞いでいたギルドの人が左右にズレて一人の老人が姿を現した。

「あ、マスター」

「うむ。体はどうかの？」

「あ、はい。おかげさまでもう大丈夫です」

「そうか。それは良かったそれでルーシィから聞いたんじやが、このギルドに入りたいとな？」

ミラジエーンさんがルーシィという人から聞いたと言っていたから、多分あの金髪の女性がルーシィさんなんだろう

それより、良いのか？

いや、良くない。

俺がギルドに入るとデメリットが生まれる事を話さなきゃいけない。

「あの・・・」

「なんじゃ？」

「俺はこのギルドに入る事は出来ません」

「・・・へ？」「」

皆がみなそう首を傾げた

ここまでハモるとは・・・と自重気味に笑う

「し、しかしウチに入るためにこのマグドリアに来たんじゃる!？」
珍しくたじろぐマスターに違和感を覚えるギルド一同いつもだったら
「そうか・・・どうしてじゃ?理由を聞かせてくれんかの?」
と落ち着いた様子で聞くはずなのだ

いかせんマスターの心情としては、変わり者ばかりいるフェアリー
テイルでミラと同じ心のオアシスになりそうな性格の少年にギルド
に入ってもらいたかったのだ

「えっと、マスターなら分かると思いますけど、俺には零魔法が使
えるんです」

「っ!？」

「「「???」」」

やはり反応したのはマスターだけ。
でも知っているようだし俺はこのギルドには居られない

被されていた布団を畳み、寝かされていたベッドから降りた。

「お世話になりました。それじゃ俺はこれで」

「待てよ!待てって言ってんだよ!」

聞き覚えのある声の主に後ろから肩を掴まれた

「何だよ、零魔法って!？」

ぐいつと肩を引つ張られて必然的に声の主、ナツと目があった。

「・・・フの魔法」

「?!」

「暗黒の大魔導師ゼレフの魔法だよ！」

「「「っ!?!」」」

「もう良いだろう?!? 俺はあのゼレフの末裔なんだ! 正規のギルドに入れる訳がねえんだよ!」

ナツの視線が揺らいだのを良いことに、俺は一気に大声でまくし立てる。

辛かった。滅龍魔導師など居るはずが無い、と笑われゼレフの末裔だから、と言って人殺しと勝手に決められて評議員に追われ、行く宛も無くようやく見つけた父への手がかりも不発に終わった。

なんでこんな事を言ってしまったんだろう。

嘘をついたまま居れば、このギルドにも入れたかもしれないのに

阿呆だ、俺・・・

このギルド、入ってみたかったのにな

「ふん。それじゃお前強いんだよな?

それじゃあ俺と闘え!」

「「「は?」」」

「おいナツ！殺されちまうぞ！？」

「ゼレフの魔法なんて・・・」

「うるせえ！俺はこいつが気にいらねえ！

ゼレフがどうしたってんだこいつはこいつじゃねえか！」

「っ！？」

ザワザワとギルドの一同がざわめき合っ。

「好きにすると良いじゃろ」

「マスター！？」

マスターはほっほっと笑いながらナツに許しをだしたそれと同時にギルドの一部の人間が俺をほらほらと笑顔で押し出していく

何なんだよこの人達は！？さっきまで怯えてたじゃないか、なのになんで！？

「俺はナツ・ドラグニル！火の滅龍魔導師だ！」

「・・・え？」

いつの間にかギルドの前の広場に押し出されたと思えば、対するよ
うにナツが立っていた。

「俺は・・・」

俺は・・・闇の滅龍魔導師だけどゼレフの末裔

暗黒の大魔導師ゼレフの・・・末裔

人殺しの汚名を付けられた化け物。

誰も殺してないのに・・・誰も・・・

「火竜の鉄拳！！」

「ナツ！お前何やって！？」

俺はっ！？

ドゴッ！ズガアアン！

いきなりの攻撃に反応出来ずナツの拳が脇腹に突き刺さり鈍い音を
立ててギルドに突っ込んだ。

「っ！？・・・ハア」

体が重い。肋骨二本は逝ったのだろうか？

体がミシミシ悲鳴をあげている

「いつまで黙ってたんだよ！お前はお前だろうがああああ！！」

ゼレフでも無い。

人殺しなんかでもない。

化け物なんかじゃない。

俺は・・・

「俺は・・・俺は、闇の滅龍魔導師カイト・アルタイルだ！」

教えて欲しかったのかもしれない。

同じ滅龍魔導師である彼に・・・

自分には気付いているのにも踏み出せない一線に押し出して欲しかったのかもしれない。誰とも分からない俺に笑顔を見せてくれた彼等に。

だから、真実を話した。

嘘をついていられなかった

だからなのかな？頭に今まではびこっていたようなモノが消えた

俺は俺を覚えてくれた人物に視線を向ける。

彼は不敵に笑みを浮かべた

「そこなくつちな！

行くぜ！カイト！

火竜の咆哮！！」

吐き出された火のブレスは前に出した俺の右手に集中していく。

『侵食』

『掌握』

そして球形になったそれを握り潰した
次の瞬間、カイトの外見に異変が起こった。

黒かった髪は赤く染まり、周りからは彼が炎であるかのように陽炎
がたちのぼる

カイトが衝突し壊れたギルドの壁の破片は熱を持ち赤みを帯びなが
ら彼の足元に転がっていた。

「これがゼレフの魔法？」

「ナツの魔法をとりこんだぞ！？」

「あれが・・・！」

盛り上がっていると悪いんだけどこれは・・・

「黙らんか！あれはゼレフの魔法などでは無いわ。ゼレフの魔法で
あつたらわしらはもう死んでおるわい！」

そうギルドの皆を黙らしたマスターがこちらにフツと微笑む。

そう、

「これが闇の滅龍魔法だ！」

闇は何も無いところに生まれない。

火や水、それらに必ずある影こそが闇。
それらが無いなら闇は何も出来ない。
だから・・・

その火や水を取り込み、闇に侵食させ、掌握する。

それが俺の、父さんの・・・魔法だ！

「面白え！おりゃああ！！火竜の翼撃！！」

カイトの腹部を捉えたはずの一撃はギルドの壁を壊しただけ。

マスターマカロフが

「ギルドが・・・」
と悲痛そうに呟いたがナツは気にすることなく背後に立っていた力

イトに拳を繰り出し、ミラがマカロフを宥める事になった。

「やるじゃねえか！」

「そつちこそ！」

ギルドの屋根に跳び移った二人は拳を相手の腹にぶつけ吹き飛んでいく。

結局、数10分後持久力負けしたカイトが負けを認め、カイトの自分を見つけた戦いは幕を閉じた。

「ほ、本当に良いんですか!？」

「うむ。じゃあ聞くがおぬしは零魔法で人を殺した事があるかの？」

(後書き)

お読み戴きありがとうございました。

闇の魔法・・・野菜先生が使うアレです(;)

書いてみてやはり文才が無い(泣)

他の先生方の作品を改めて拝見させてもらってから、出直してきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7888s/>

妖精の尻尾 始めの一步 短編

2011年8月30日06時54分発行